

た。以上のことから日隆は、尼崎門流・本興寺門流として日蓮門下に対外的に宣言するのではなく、日隆教学の正統性を著述中において主張する際に用いられたのではないかと推察する。

また、教学応用期の『法華宗本門弘経抄』『開迹顕本宗要集』では、門流の表記が比較的少ない。なぜなら、両書は「門流の義」「当宗の義」としての使用が散見され、『法華宗本門弘経抄』では『三百帖』、『開迹顕本宗要集』では『宗要類聚抄』等といった特定の文献や問題について、日隆教学を以て解釈を試みた性質とも関係がある可能性を有する。⑥『妙蓮寺内証相承血脈之次第條目事』では、「当(門)流」といった表記に限られるが、日蓮より続く法脈に日存・日道を加えてこそ、八品門流の系譜が実現されるであると主張している。

よって、日隆の著述中に見える門流表記と、日像筆曼荼羅本尊の極書との関係性は、四条門流における正嫡意識を根底に置き、その正統な継承者としての自覚を意識していることが窺える。すなわち、極書では日蓮より日朗・日像へと続く法脈を、妙本寺(妙顕寺)日晷より日存・日道へと相承すると規定し、日隆自身が第九番目の相承者であると表明したものであると考えられる。そして、日隆の著述に見える門流の表記は、極書の表明を實踐すべく、上古及び中古天台教学、並びに他の日蓮門下のあらゆる教義問題に対し、本門八品を中心とした日蓮義をもつて解釈していくことで実証していったのではないかと思量する。

なお、本稿では日隆の教学面においての門流意識について概観したのみであり、布教面による門流意識については今後の研

究課題としたい。

流布本『妙法蓮華経優波提舍』考

金 炳坤

婆敷槃豆による本論の著述並びにその梵本については、須利耶蘇摩、真諦、神昉らに帰される伝承によってその一端を知ることができ、これらはいずれも裏付けが得られないそれ独自の記述である。ことにコータン語『法華経綱要』に関しては、本論からの影響が顕著であるとの指摘があるが、彼の底本の言語(梵語か)までは解明されていない。また『至元法宝勘同総録』によって本論の蕃本(蔵訳)の存在が知られるようになったが、その後の『プトン目録』によればすでに逸したようである。チベット語訳『妙法蓮華註』の訳者が本論の蔵訳といかなる関係にあるかについては、今後の検討するべき課題であるが、少なくとも彼はヴァスバンドウによる本論の存在を認識していたとされている。漢訳については、曇林の序を具える菩提流支の二巻本と勒那摩提の一巻本を挙げる『歴代三宝紀』を初見として、『開元釈教録』では第二出にして初めに帰敬頌を有する前者と初出の後者が同本に基づく訳出で大同小異なることを加えるが、そのじつ細かい字句の相違は枚挙に遑がなく、宋元明清版・天海版・鉄眼版には帰敬頌を有する後者の別本が収録される。かつ新訳なる義浄の五巻本を挙げるが、この訳はその後の展開が全く知られない。かくして本論のテキストは梵蔵共になく、摩提と留支の漢訳が伝わるのみである。

さて、「今具依二文」と自らの校訂テキストによる『法華論

疏』は「経曰帰命一切諸仏菩薩」で始まるテキストを取り上げ、この一文に対して注釈を施している。但し、管見の限り藏経所収本文中、この一文を有するテキストは存在しない。ところが『法華経論述記』『妙法蓮華経論子注』とも本箇所に対する注釈を行っている。つまり、これにより入蔵以前の形を保っている注疏所引の『法華経論』即ち八世紀頃までの流布本は、藏経本とは一線を画す別系統であることが判明するのである。もともと金天鶴博士は『子注』所引の『論』を指して第三のテキストと称するが、まさしく系統を分別しうる要文こそこの一文になるのである。なお、写本に関しては、敦煌本の摩提訳（BD11838・S.2504）と西訳混合（BD10071・BD07753）は首欠なるがゆえに判然としないが、聖語藏本の留支訳（No.1847）と金剛寺本の留支訳（0682-001／文治三年）は藏経本に由来することが判別できた。

ところで、和刻本にこの一文有ることが塩田義遜博士によって指摘されていること、さらには清水梁山師の国訳がこの和刻本を底本にしていることについてはあまり知られていない。和刻本は寛永二年に端と発する流支訳で計四種知られるが、諸本との対比により、これが流布本と同系統であることが新たに判明した。しかも、その過程において『論疏』『法華論記』の現行本までもが、和刻本の影響下にあることが明確になったのである。概していえば、注疏では注釈にあたり該当する『論』の本文を全文（『述記』はその限りではない）挙げる。中でも『述記』（前半部）『子注』の文例は、当時の流布本の様子を知る上で極めて重要な資料である。対して『論疏』『論記』も『論』

の本文を挙げるが、現行本に頼るばかりでは知る由もないが、じつはこれらの文例は当初よりものではない。前者は天永四年の現存最古の写本からは確認できず、正徳四年の現存唯一の和刻本にて、後者は承応二年の現存唯一の和刻本からは確認できず、大正六年の『智証大師全集』にて、夫々和刻本により追加される。ちなみに当初よりのものは一字下げの本文に限られる。加えて慶安五年の『科註妙法蓮華経論』も和刻本によることが確認できた。

そもそも流布本の最古層にあたる『論疏』『述記』は問題があり、『子注』は一部欠損である分最良とはいえないが、和刻本もその流伝が定かでない分最古とはいえないのである。従って現状では『子注』所引の『論』こそ漢訳の古形に最も近いといえるのである。